

中学生の働くイメージに関する一考察；学年差に着目して

奥山夢菜¹ 小西凌²

¹ 三重大学大学院地域イノベーション学研究科博士前期課程

² 三重大学大学院地域イノベーション学研究科博士後期課程

要旨

本稿では、中学生が働くことにどのようなイメージを抱いているのか、また学年でそのイメージに差があるのかを明らかにすることを目的としている。中学生を対象に、働くイメージに関するアンケート調査を行い、KH Coder を用いて計量テキスト分析を行なった。その結果、1 年生は「大変」という抽象度の高いネガティブイメージを抱いており、2・3 年生は「ブラック」、「人付き合い」が「面倒くさい」など、具体的なネガティブイメージを抱いていることが明らかになった。この働くネガティブなイメージが探究学習・キャリア教育の効果に影響する可能性があることが見出された。今後の展望として、キャリア教育を通じて、そのネガティブイメージを活かしながらも、自身のキャリアと真摯に向き合い、主体性のある学びを尊重することへの期待について論じた。

キーワード：働くイメージ、探究学習、キャリア教育、計量テキスト分析、中学生

1. はじめに

新学習指導要領において、「総合的な学習（探究）の時間」が導入され、すべての生徒が探究学習を行うことが求められている。文部科学省によると、「総合的な探究の時間」は、「変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指していることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものである」（文部科学省 2022）と位置付けられ、「子どもが進んで問題解決を行っていく学習」が目指されている（大前 2013）。しかし、国内において、探究学習に関する知見は十分なものとは言えず（村山 2013）、現在も各学校が試行錯誤して取り組んでいるのが実態であろう。村上（2012）は、その理由として、従来の授業とは異なり学力が維持できるのかの不安感や、探究学習の成果が示されていない（示されづらい）こと、教え込む授業がスタンダードになっている現状を挙げている。本稿では、なかでも探究学習の目的のひとつとされているキャリア教育に着目する。

キャリア教育^[1]という言葉が初めて登場するのは、1999 年 12 月 16 日に提出された

中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてであり、2022年から始まる探究学習に比べれば、取り組みとして数十年は古い。しかし、このキャリア教育が強力に推進されるようになった2000年代においても（本田2009）、自分の受けたキャリア教育が「役立っている」と答える若者は「かなり」と「やや」を足しても2割弱、高校生でも3割弱しかいない（西村ほか2010）。他の調査において「キャリア教育による生徒・学校の変化」を聞いたところ、生徒の満足感や意欲が「増した」とする回答は同様にそれぞれ約3割程度しかみられなかった（ベネッセ教育総合研究所2008）。最近の調査においても、リクルートが2021年に高校生を対象にして実施した「第10回高校生と保護者の進路に関する意識調査2021」では、「将来について気がかり」に思っていることの上位に「就きたい職業に就けるか」を挙げており、2005年代から6割の高校生は変わらずそう答えている。また性別では、女子が「職場の人間関係がうまくいくだろうか」、男子は「就きたい職業に就けるか」が上位という性差も確認された。このようにキャリア教育推進以降も、教育効果に大きな変化は見られず、絶えず子どもたちは進路に対する不安を抱えている姿であることが推察される。

抽象的で曖昧なキャリア教育を批判する本田（2009）^{〔2〕}は、キャリア教育推進の背景から、学校や教師が、生徒に対して「勤労観・職業観」や「意識決定能力」「将来設計能力」を「持たねばならないという要求」を行うことで、生徒自身は進路選択の不安が高まって、要求される社会で自己実現をしなければならないという強いプレッシャーに晒されることになるかと警鐘を鳴らしている（本田2009）。

以上のような、キャリア教育における見えにくい効果や、子どもたちの自己実現に対するジレンマになっている可能性を鑑みると、現状の子どもたちが仕事や働くことに対して、どのようなイメージを持っているのか改めて検討する必要があると本稿の着想に至った。なお、多くの中学2年生は職場体験を経験し、中学3年生は（高校）進路選択を迫られるなど、中学生の学年によっては働くことに対するイメージが変化しうることからも、「中学生の探究学習」と一括りにする結果は早計であると考えられ、学年差にも着目するべきだろう。以上から、次のようなりサーチクエスチョンを設定する。

Research Question

中学生は働くことにどのようなイメージを抱いているのか。また学年でそのイメージに差があるのか。

2. 調査概要

本稿では、2022年11月から2023年2月にかけて、東海圏X市の公立中学校（以降、A中と呼ぶ）を対象にした、探究学習の一環によって得られたデータを使用する。

A中では、2020年から勤労観・職業観を育むことを目的としたA中独自のプログラム

を実践しており、地域で活躍する社会人が講師となって講演会やワークショップを全学年対象に展開している。調査時点の 2022 年上半期には 3 回のプログラムが終了している^{〔3〕}。その中で 4 回目として、第一著者が講師の依頼を受けたことが調査依頼を行うに至った経緯である。

第一著者は、中学生が今後のキャリアを考えるにあたり、多様な働き方についてや、失敗をしても仲間と協力してやりなおせるというメッセージを伝えるために自身のキャリアを事例とした講演を行った。事前に、中学生が日頃どのような社会人と関わり、働くことについてどのような意識を持っているのかを確認するため、講演を構成・実施するために作成した事前学習ワークシートを A 中校長と打合せの下、作成、実施した。

調査方法は、A 中の全校生徒（1 年生 178 名、2 年生 204 名、3 年生 183 名）565 人を対象に、第一著者の担当授業数日前に事前アンケート^{〔4〕}として、担任から配布・回収してもらった。アンケート項目として、中学生が日頃どのような社会人と関わり、働くことにどのような意識を持っているのかなどを事前に確認するため、「1. 働くことに対するイメージ、2. 知っている仕事、3. 憧れの人について書こう、4. 仕事のやりがいについて周りの大人 3 人に聞いてみよう、5. 最近わくわくしたこと」について聞いており、回答には 5 分程度を要する（付録参照）。有効回答は、1 年生 145 名、2 年生 134 名、3 年生 126 名、計 405 名となった。

3. 分析方法

分析方法は、文章データを計量的に分析する方法として提案されているフリーソフトウェア KH Coder^{〔5〕}による、計量テキスト分析である。KH Coder で分析するために、アンケート調査票の一部である「1. 働くことに対するイメージ」に手書き記入されているものを調査者が office ソフト Microsoft365 Excel に転記し、素材データを作成した。アンケートでは、「働くことに対するイメージ」を羅列して箇条書きにして記入している生徒が多かった。本稿では、生徒の特性（背景）に迫るのではなく、イメージの傾向を重視したいことから、同一個人が、複数のイメージを箇条書きしていた場合であっても、それを一つ一つのコメントに区切り、分割エクセルファイルのセル 1 個として取り上げることとした（「大変、忙しい、お金がもらえる」→「大変」「忙しい」「お金がもらえる」）。その際、分析の適性を図るために、一般的な漢字表記に統一し（たいへん→大変）、第一第二著者でチェックを行い間違いがないことを確認している。また、学年ごとにデータファイルを作成し、それぞれ KH Coder に挿入し、学年ごとに傾向をみた。そこから、出現語頻度から全体を確認した後、対象データから共起ネットワークを抽出し、結果から考察を行った。出現語の解釈に当たっては、KWIC コンコーダンス機能^{〔6〕}を用い、それぞれの語がどのように用いられているのか文脈を探った。

4. 結果と考察

4-1. 頻出語

コメント 892 件のうち、中学 1 年生 292 件、中学 2 年生 325 件、中学 3 年生 275 件を分析対象とし、KH Coder を用いて、それぞれの頻出語の上位 10 語とその出現回数、割合を表 1 に示した。

表 1. 頻出語句上位 10 (学年別)

1年生			2年生			3年生		
頻出語	出現回数	割合	頻出語	出現回数	割合	頻出語	出現回数	割合
大変	76	26.0%	大変	62	19.1%	大変	54	19.6%
楽しい	34	11.6%	疲れる	26	8.0%	お金	35	12.7%
お金	29	9.9%	忙しい	24	7.4%	楽しい	30	10.9%
人	27	9.2%	楽しい	23	7.1%	疲れる	19	6.9%
イメージ	18	6.2%	お金	22	6.8%	生活	13	4.7%
忙しい	17	5.8%	自分	15	4.6%	働く	13	4.7%
疲れる	16	5.5%	仕事	14	4.3%	稼ぐ	12	4.4%
仕事	13	4.5%	ブラック	10	3.1%	人	12	4.4%
働く	12	4.1%	関係	10	3.1%	自分	11	4.0%
稼ぐ	10	3.4%	辛い	10	3.1%	忙しい	11	4.0%
合計セル数	292		合計セル数	325		合計セル数	275	

第一に 1 年生は、他学年と比べ「大変（76 回）」の出現割合が高くなっている。後述する共起ネットワーク分析で詳細を見るが、他の 1 年生の頻出語をみても、働くことに対して「大変」という極めて抽象的なイメージが先行している様子が推察される。第二に、2 年生でのみ頻出語として表れた特徴語がいくつかあった。「ブラック（10）」「関係（10）」「辛い（10）」である。「ブラック」に関しては、文脈を確認しても、ブラック企業^[7]を指していることが明らかになった。また「関係」は特に「上下関係」であり、ポジティブな含意で使用されているわけなかった^[8]。「辛い」も合わせて、ネガティブな含意が 2 年生では特徴的にみられる。第三に、3 年生の頻出語を確認すると、この学年のみに「生活（13）」が高頻度で出現した。これは「生活するために必要」「働いて得たお金で生活する」「お金を貯めて将来良い生活をする」といった文脈で使用されており、働くことが生きることとして繋がっていることが示唆される。

一方で、ネガティブな含意の他に、1 年生と 3 年生で頻出した「人」に焦点を当てると、「人のためになる（役にたつ）」「人から感謝される」「いろいろな人と関われる」というような文脈で確認されることが多く、自身の役割を意識するため働くことに意義を見出す結果も得られている。Erikson（1963）が従来から指摘するように、青年期（13 歳～

されているようである。

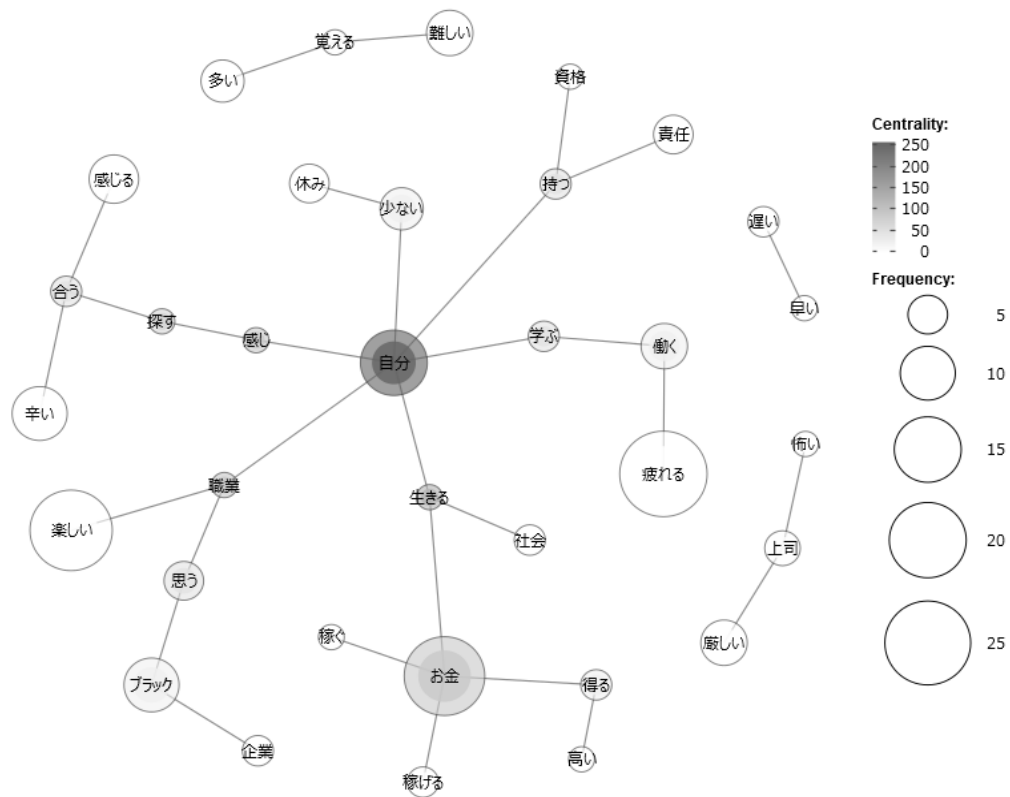


図2. 共起ネットワーク（2年生）

次に2年生の共起ネットワークを図2に示した。2年生の共起ネットワークは1年生に比べて複雑性を帯びている。媒介中心性の高い「自分」から6つの議論に分かれており、1年生に比べて、「少ない」「休み」や、「職業」「楽しい」「ブラック」など、働くことに関するネガティブな印象が具体化されている。また、「自分」から「生きる」を介して「お金」につながるネットワークも興味深い。1年生の「働くことでお金がもらえ、貯めることができる」というネットワークより更に、働くことと生活を結び付け考えているのではないかと考察できる。

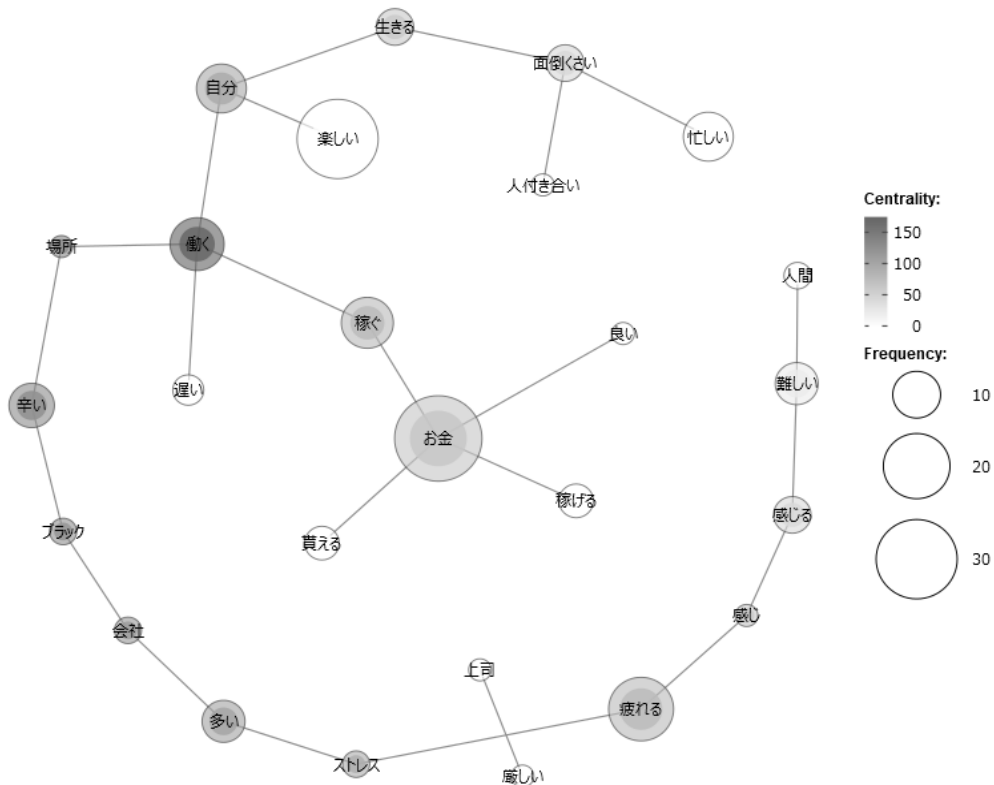


図 3. 共起ネットワーク（3 年生）

最後に 3 年生の共起ネットワークについて検討したい。これも「働く」という媒介中心性の高い語句から 4 つの文脈が展開されている。1 年生、2 年生に比べ、「面倒くさい」「人付き合い」「忙しい」と伸びていることも興味深い。一方で「働く」から「場所」に伸びる一つのネットワークは極めて長く、業務や人間関係の難しさなどネガティブな印象が連続して連なっている。2 年生より更に具体的に、働くという事に対し自分事として現実的に連想をしている事がわかる。また、ネットワークの分岐も複雑に拡散する事なく多くの生徒が同様のコメント構造を持つことがうかがえる。

5. まとめと知見

本稿では、中学生を対象に「働くイメージ」をアンケート調査で聞き取りを行い、そこで表出された語句やその文脈を計量テキスト分析の方法で分析した。そこで得られた結果は次のとおりである。1 年生は「大変」の頻出度が高く、お金について、どういう仕事があるか、働くことでどう思うかなどと、働くことに対して極めて抽象的なイメージが先行している様子が推察される。2 年生は「ブラック」「関係」「辛い」など、ネガティブな含意が特徴的にみられる。3 年生は「生活するために必要」など、働くことが生活に繋がっていることが示唆され、共起ネットワークについて「働く」から「場所」に伸びる一つ

のネットワークは極めて長く、ネガティブな印象が連続して連なっていた。学年全体を通じて、働くイメージに対するネガティブな印象は強いが、学年が上がるにつれて、そのイメージも具体化され、3年生では働くことが生活に繋がる気付きを得ている。

以上の結果から、探究学習に関する知見を述べる。結果から最も言えることは、中学生は働くことに対して、かなりネガティブな印象を抱いていると、頻出語や共起ネットワークの傾向から客観的に示すことになったことである。先に述べたように、探究学習やキャリア教育は、自分はこれから何を学んでいきたいのか、どんなことに取り組んでいきたいのか、自己主体的に学ぶように働きかける教育、学習活動であった。しかし、本稿で示したように、働くことに対する抽象的なネガティブイメージが強く先行してしまっているのは、探究学習やキャリア教育が、学校内で行われる「教育の職業的意義の希薄化」（本田 2009）である教育・学習活動に留まってしまい、その場では興味深い、面白い知的活動であっても、自己主体的に学ぶ、働くことにつながらないのではないかと仮説立てることができる。

また、中学生にとってどのような職業あるのかという情報・知識が不足していることは課題として挙げられる。その背景には、中学校の進路指導においても、職業知識は、生徒の生活の中で自然と身につくだろうと楽観視され、職業理解を促進させる指導が体系的に行われていないからだという指摘がある（吉中ほか 2003）。本調査においても、その傾向は見られており、「知っている仕事」を聞いた項目^[11]において、「学校の先生」「警察官」「医者」「YouTuber」など、かなり狭い範囲で得た経験・情報を下に記述されていた。その上、働くことに対してネガティブイメージが先行していた場合、自身のキャリアに繋がるよう自己主体的に学びが生じるのか疑わしくなるのである。しかし、働くことに対するネガティブ思考が自身のキャリア形成に関して悪影響であるとは限らないことに留意しなければならない。また本稿は現行の探究活動やキャリア教育を批判することを目的としていない。あくまでも、現在の中学生の働くことに対するネガティブなイメージが、その探究活動やキャリア教育の効力に影響していないか考慮しているのである。

今後の展望としては、本稿で明らかになった人間関係の悩みや仕事へのストレス・不安など働くことに対するネガティブなイメージを、完全に払拭・改善するというのではなく、むしろそのネガティブイメージを活かしながらも、自身のキャリアと真摯に向き合い、主体性のある学びを尊重することが期待される。また、より自分事として、将来どのように生きたいかを考えることで、働くことへの抽象的でネガティブなイメージにとらわれることなく、それを予期できるよう様々な仕事や価値観、ロールモデルを知ることへの工夫も効果的と考えられるのではないか。そのため探究学習の第一歩として、仕事・職業を知ってもらうことが重要であることも付記したい。

最後に残された研究の課題を述べる。アンケート調査は、本来学術的アウトプットを想定して作成されたわけではなかった。そのため、アンケートは中学生にとって答えやすい

デザイン性を重視し、聞き取り項目も短時間で飽きられないように少なくなるよう尽力した（付録参照）。そのため、働くことに対するイメージを規定する要因、例えば性別や学業成績や家庭背景など考慮することはできなかった。また、学年において、イメージに差があることは確認できたが、その理由を考察するには、聞き取り項目の不足が課題となり、本稿ではそこまで切り込むことができなかった。知見として提出した、働くことのイメージと探究学習の関連についても、不明瞭なことが多い^{〔1 2〕}。これらを考慮した調査票の作成・分析や、インタビュー調査などで明らかになる質的要因の検討は、次の研究の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教員である青木雅生教授（三重大学）、西村訓弘教授（三重大学）にご指導いただきました。深く感謝申し上げます。

なお、本稿は 2023 年 8 月 11 日にユマニテク短期大学で開催された第 6 回ユマニテク教育フォーラムにおいて、第一著者が行なった実践発表の内容を下に加筆・修正を加えたものです。発表の機会を提供してくださった関係各位、および当日の発表に際し有益な質問やコメントを寄せてくださった方々、特に中西良文先生（三重大学）、鈴木達哉先生（ユマニテク教育研究所）、市川歩美先生（三重県立神戸高等学校）には、現場で働かれる教師ならではのコメントも頂戴し、より実践的な論文に発展させることができました。記して感謝致します。

また、本稿で用いたアンケートデータは、X 市 A 中学校の先生方、児童生徒の皆様の協力があり得ることができました。厚くお礼申し上げます。

注釈

〔1〕 キャリア教育とは、人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育（文科省 2011）とされ、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」という定義が与えられている（児美川 2013）

〔2〕 本田は「『結局は自分で考えて自分で決めよ』と、進路に関する責任を若者自身に投げ出すことに終わっているのが現在の『キャリア教育』ではないか」と批判する（本田 2009）。

〔3〕 匿名性を保つために、企画内容については詳細を割愛している。

〔4〕 文章で記述している場合もあれば、単語で箇条書きをしている回答もある。一人の平均文字数は次のとおりである。中学 1 年生 16.6 文字、中学 2 年生 16.6 文字、中学 3 年生 25.5 文字。

- [5] KH Coder は、樋口耕一によって制作され、内容分析及びテキストマイニング用のソフトウェアである。特定の語がどれだけ出現しているかを検索する機能や、元のテキストデータ中でどのように語が用いられているか文脈を確認するための機能が備わっているため、文脈に立ち返り確認することができる（樋口 2020）。
- [6] KWIC は「Keyword in context」の略称で、コンコーダンス（concordance）は「用語索引」のことを指す。前後の文脈を含めて、文中でキーワードが使われている場所を表示する機能である（樋口 2020）。
- [7] 多くの回答が「ブラック」と単語のみであり文脈は理解し難い。しかし、一部「ブラック企業は辛そう」とあることから、多くの意図としては「ブラック企業」を指していると考えられ、「職務に限定されない非限定的な労働を強制し、かつ、定着が悪い企業」（小木曾 2016）について言及していると、本稿では判断した。しかし回答者がその含意を理解しているかどうか留意する必要がある（中学生にとって、何が「ブラック企業」と言えるのか）。
- [8] 「上下関係が厳しい」「上下関係が大変」といった文脈が複数確認できた。しかし、「上下関係」についても、前述の「ブラック」と同様に、「上下関係」の何に「厳しい」「大変」を感じているのか、検討の余地は残る。
- [9] 共起ネットワークの描画には、名詞、固有名詞、形容詞、動詞のみに指定を行っている。また集計方法は「H5」（セル）を単位にした。共起関係の絞り込みに関する計算は Cosine 係数使用し、最小スパニング ツリーのみを描画している。
- [10] 第二著者が同様の方法で共起ネットワーク分析に取り組んでいる（小西凌：流行語「親ガチャ」をインターネットコメントはどのように捉えているのか-貧困若年女性を取り上げた事例記事に寄せられたコメントの分析、東海社会学会年報、No15、pp67-80.）。KH Coder 分析において、多くが第二著者の設定方法を採用している。
- [11] 付録を参照の通り「知っている仕事」の項目は、調査票全体において非常に小さく、回答者にとって、「思いついた仕事を数個挙げた」に過ぎない可能性は十分にあるだろう。そのため、それだけで「知っている職業が少ない」と判断するのは軽率かもしれないが、回答者全体が挙げた職業が似通っていたことは、それだけ回答者が知っている仕事の範囲が限定されていることが示唆できるのではないかと。
- [12] では、こういったキャリア教育が理想なのか。児美川（2013）は、「職業（仕事）についてのいろいろな選択肢を知り、そのどれかに興味を持つ。そうしたら、その職業（仕事）について深く調べてみる。その結果、違うなと思ったら、また別の選択肢について興味を寄せてみる。そうしたらその職業について…。求められるのは、こうした学習の繰り返しであり、「自己理解」と「職業理解」との往復関係をつくりあげることである」と指摘する（児美川 2013）。

参考文献

- Erikson, E. H., *Childhood and society. 2nd ed.* W. W. Norton.,1963. (西平直・中島由恵訳：アイデンティティとライフサイクル、誠信書房、2011.)
- 一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会・(株)リクルート：第 10 回高校生と保護者の進路に関する意識調査 2021、2021.
- 大前暁政：小学校理科における探究学習の成立に必要な諸条件の検討、心理社会的支援研究、No4、pp67-80、2013.
- 児美川孝一郎：キャリア教育のウソ、筑摩書房、2013.
- 文部科学省：中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、2011、最終閲覧日 2023 年 10 月 24 日.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm
- 西村公子・下村英雄・高久聡司・川崎 友嗣：学校時代のキャリア教育と若者の職業生活、労働政策研究報告書、No125、2010.
- 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版、2020.
- ベネッセ教育総合研究所：中学校の学習指導に関する実態調査報告書、2008.
- 本田由紀：教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ、筑摩書房、2009.
- 村上忠幸：知的パフォーマンスとしての探究学習、教育実践研究紀要、No12、pp69-78、2012.
- 村山哲哉：小学校理科「問題解決」8 つのステップ-これからの理科教育と授業論-、東洋館出版社、2013.
- 文部科学省：今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開、2022、最終閲覧日 2023 年 8 月 18 日 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm、2022.
- 吉中淳・石井徹・下村英雄・高綱睦美・若松養亮：中学生・高校生の職業知識の広がりと言職業関心に関する研究、進路指導研究、第 22 巻第 1 号、pp1-12、2003.

事前ワーク

学年

名前

働くことに対するイメージ

知っている仕事

仕事の「やりがい」について
周りの大人3人に聞いてみよう！

① 誰に聞きましたか？【 】

② 誰に聞きましたか？【 】

③ 誰に聞きましたか？【 】

憧れの人について書こう
(どこが素敵?)

最近わくわくしたこと

